

## 学術情報XML推進協議会の活動

学術情報XML推進協議会会長

時実象一

XSPAの活動はもともとJ-STAGEと深く関係がある。J-STAGEがどのように生まれたかについては、なかなか関係者も語りにくいきさつがあったが、1999年の誕生の際は、自分も少なからずかかわっていた。そもそもJ-STAGEという名前も、最初はSTAGEにしようかという案があったのだが、あまりに一般名詞なのでJをつけよう、と提案したのは自分である。

J-STAGEでは早くからXMLを採用すべきだというアイデアがあった。もっともそのころXMLとは何か、どのように役に立つのかということは誰もわかっていなかった。それを勉強しよう、というので、2000年にはイリノイ大学アーバナシャンペイン校に大勢で出張にいたり、その後学会の先生に集まってもらって検討会をしたり、またXMLエディタの開発を試みたりしたのだが、その時点ではこれといった成果には結びつかなかった。JATSの前身であるNLM DTDが生まれたのが2002年であるから、J-STAGEの挑戦はちょっと早すぎたといえる。

そのうち、日本化学会や「情報管理」誌のSGMLの挑戦を経て、国内の印刷会社にも次第にマークアップ言語の経験が蓄積してきたところに、2009年にNLM DTDのワーキング・グループから多言語対応の検討を進めているので協力して欲しいという連絡が入った経緯については座談会で話されたとおりである。このころ自分は愛知大学に勤務しており、直接はJ-STAGEの仕事からは離れていたが、電子ジャーナル関係の海外学会には頻繁に出かけており、その中でNLM DTDやJATSの情報にも接することができたのである。

XSPAが結成されてから最大のイベントはJATS-Con Asia in Tokyoであったと思う。この企画は、JSTの当時の水野充知識基盤情報部部長の全面的な支援をいただき、また国立情報学研究所の武田英明教授の他、米国、韓国、スリランカ、などから講演者を呼んで2015年10月19日に開催することができた。諸般の事情で、2回目はいまだ開催できていないが、アジアの学術出版者が経験交流するよい機会であったので、いつか開催し

たいものと考えている。

XSPAの活動は比較的地味であるものの、JATSの日本語翻訳版の作成・公開やJ-STAGEに対する提言の提出など、J-STAGE電子ジャーナルを中心とする学術情報の普及と発展のために縁の下で力持ちとなっていると信じている。



JATS-Con Asiaでの発表者